人間文化創成科学論叢　第24巻　2021年

ビジネス場面におけるスピーチレベルと指標的機能
―ロールプレイによる部下のタイ人と日本人の敬語使用を比較して―

チッターラーラック　チャニカー*

Speech Level and Indexical Functions in Business Situations
A Comparative Studies of Thai Japanese Speakers and Japanese Native Speakers as Subordinates in Roleplay

CHITTARARAK Chanika

Abstract

The purpose of this paper is to investigate how Thai Japanese Speakers and Japanese Native Speakers as subordinates use honorifics in roleplay-based business conversations and analyze the indexical functions by applying the concept of speech level and categorizing it into 3 levels which are a masu form mixed with Sonkeigo and Kenjougo, a regular masu form and a non-masu form. The findings indicated that Thai Japanese Speakers primarily used masu form, but Japanese Native Speakers used masu form mixed with Sonkeigo and Kenjougo which is considered as a more polite form than the regular masu form. Speech level shift to the non-masu form was observed in both Thai Japanese Speakers and Japanese Native Speakers' utterances. In terms of indexical functions, this research found that throughout each level of the speech levels a conversational context was created. It showed interlocutors' relationship and speakers' roles in such contexts. This study contributed to a better understanding that the speech level as linguistic forms, in both native and non-native speakers' utterances, can perform complex functions depending on contexts.

Keywords：Speech Level, Honorifics, Indexicality, Business Situation, Thai Japanese Speaker

1．はじめに

ビジネス場面という公的場面や上下関係を持つ会話においては、聞き手との関係などを考慮しつつ、会話の状況に合わせて適切な敬語表現の使い分けが必要となり、丁寧さを示す敬語は欠かせないものだと考えられる。会話における敬語使用には、単語レベルの敬語の選択、そして文レベルの文末スタイルの丁寧体・普通体の使い分けが求められる。話し手が選択した敬語表現は、丁寧さ、聞き手との関係、会話の状況を示す機能を果たしている。本研究では、文レベルで文末における言語形式と敬語の言語形式の丁寧度、そして文脈における敬語の機能を包括的に検討するために、敬語使用から見られたスピーチレベルと指標的機能に焦点を当てる。そして、非母語話者の観点について、敬語が重要な課題にも関わらず、タイにおける日本語教育現場において、敬語形式を中心に導入されることが多いと報告されている（フクシマ，2018）。そのため、敬語使用の運用能力が必要とされるビジネス場面において、非母語話者のタイ人は話し手として会話の文脈や状況に応じた敬語を選択して使い分けることや、敬語使用を通して機能を果たすことについて検討するべきである。そこで、本研究では非母語話者

キーワード：スピーチレベル、敬語、指標性、ビジネス場面、タイ人

＊平成31年度生　比較社会文化学専攻

と母語話者の視点を取り入れ、社内会話における部下のタイ人日本語話者（以下、TNS）と日本語母語話者（以下、JNS）による敬語使用をスピーチレベルの観点から分析を行い、会話の文脈における指標的機能について考察する。

2．先行研究

2．1　敬語とスピーチレベル

コミュニケーションにおける敬語使用に関する先行研究の中では、単語レベルと文レベルの分析観点が多く取り上げられている。単語レベルの敬語分析に関しては、単語ごとの敬語が、敬語分類（文化庁, 2007；蒲谷・金・吉川・高木・宇都宮, 2010など）に沿って、尊敬語、謙譲語Ⅰ、謙譲語Ⅱ、丁寧語、美化語という5分類に分類される。一方、文レベルの分析については、文末形式である「です・ます」の使用・不使用が注目され、丁寧体（デスマス体）と普通体（非デスマス体）に大きく分けられ、多くの研究では「スタイル」[1]と呼ばれる。そして、丁寧体及び普通体の選択によって聞き手との関係の認識・会話の状況が示されると説明されている（宇佐美, 1995, 2015; Cook, 1998; Okamoto, 1997, 2011; Hudson, 2011など）。他方、宇佐美（1995, 2015）、三牧（2002）は、文末形式に加え、尊敬語・謙譲語などの敬語表現に合わせて「スピーチレベル」という用語を用い、言語形式の丁寧度を表すものとして捉えており、さらに丁寧体及び普通体の割合で会話における「基本スタイル」を探るということもできると指摘している。本研究では宇佐美（1995, 2015）や三牧（2002）に倣い、文レベルの敬語使用を「スピーチレベル」と呼び、文末形式を超えたスピーチレベルの位置付けで敬語の言語形式を分析する。また、宇佐美（2015）の指摘によれば、スピーチレベルには丁寧度・改まり度を表す機能が付随しているが、言語形式を基準として判断しているにすぎない。そのため、スピーチレベルの機能を解釈する際に、後述する指標性の観点で個々の文脈に合わせて検討する余地があると考えられる。

2．2　指標性の概念

敬語及びスピーチレベルの機能を考察する際に、本研究では指標性の概念（Silverstein, 1976）を援用する。指標性とは、コミュニケーション場面においてことばを通して、文字通りの意味以外に、コンテクストにおける社会的関係、年齢、役割、アイデンティティなどの要素が指し示されることを説明している概念である。敬語及びスピーチレベルの機能と使用される文脈を検討する際、指標性の観点を取り入れた研究にはCook（1998）、Okamoto（1997, 2011）、Hudson（2011）などがある。敬語使用・不使用またはスピーチレベルの機能については、丁寧さの有無、話し手と聞き手の間の社会的距離及び関係、談話上の役割、アイデンティティ、または場の改まりなどを示す複数の指標的機能があり、文脈によって、敬語使用・不使用を通して指標されたものが異なる可能性もあると指摘されている（Cook, 1999; Okamoto, 1997, 2011）。前述のように、スピーチレベルにおいては敬語を言語形式として捉えており、丁寧度の分析に留まっているため、本研究では指標性を理論として用い、スピーチレベルを包括的に捉えることにする。また、敬語使用によるスピーチレベルの機能を検討する際にも、指標性を援用した先行研究で指摘されているように、個々文脈に属している要素の側面を考慮した上で機能を考察する。

2．3　会話における敬語使用に関する研究

ビジネス場面及び上下関係を持つ会話における敬語と機能に着目した先行研究を述べていく。喬（2014）はビジネス場面を取り上げて敬語を単語レベルのみで量的分析した。喬（2014）ではビジネス場面における日本人と台湾人学習者の両方による敬語使用の結果から「です・ます」の使用が多かったことが確認された。喬（2014）の調査から、ビジネス場面における母語話者と非母語話者による敬語の全体的使用がわかったが、敬語を単語レベルでの量的分析のみに依拠しており、狭い敬語の形式の面に留まるという限界がある。一方、文レベルの観点で分析した先行研究の中で、佐竹（2016）によれば、上下関係のある場面において日本人は丁寧体を多用するという特徴が見られた。指標性の観点で敬語使用の機能まで考察したOkamoto（2011）とHudson（2011）は上下関係を持つ日本人の会話を用いて分析を行った。Okamoto（2011）とHudson（2011）両者の共通の解釈として、目下の側が丁寧体を使用したことにより、話し手と聞き手の間に上下関係または距離が構築され、社会的役割、

アイデンティティなどが示されたという特徴が見られた。Okamoto（2011）、Hudson（2011）では、スピーチレベルの現象と機能を以下のように説明している。会話におけるスピーチレベルは必ずしも一定しておらず、スピーチシフトの現象もあり、それらの使用は話し手が主体として文末形式の丁寧体・普通体、または尊敬語・謙譲語を含んだ表現を選択して使うものだと捉えるべきだと指摘されている。機能の側面については、個々の文脈において丁寧体・普通体の使用の選択が意味を伝わる以外に、何らかの機能を果たしている。特にHudson（2011）の調査から挨拶、感謝、謝罪などの社会的行為が求められる文脈においてそれらの行為を示すために敬語が使用された特徴も見られた。そのため、指標性の観点から実際の会話における敬語使用・スピーチレベルは固定しているものではなく、流動的な現象として捉えられ、使用される文脈によって機能が多様であると考えられる。

以上、言及した敬語使用及びスピーチレベルの先行研究では、量的分析においては丁寧語の機能まで踏み込むことができておらず、一方で質的分析においても文末表現の「です・ます」使用・不使用に注目しがちである。また、スピーチレベルの研究における対象者に関しては、母語話者を対象にした研究は多くなされてきたが、背景知識が異なる非母語話者を対象にして丁寧度を考慮した観点と丁寧語の機能に着目する比較的研究は管見の限りまだ少ない。そこで本研究では、非母語話者のTNSを対象にし、言語形式による丁寧度を考慮したスピーチレベル（宇佐美, 1995; 三牧, 2002）の観点で敬語使用を検討する。先行研究を踏まえて、本研究では上司と部下による社内会話において、TNSとJNSによる文レベルの敬語使用の実態を解明することを目的とし、スピーチレベルと各スピーチレベルにおける指標的機能を分析する。

3．研究課題

本研究では、ビジネス場面の社内会話を取り上げ、部下役のTNSとJNSの発話におけるスピーチレベルを把握した上で、文脈的要素を考慮しつつ、個々の文脈における指標的機能を考察していく。研究課題は以下のように設定した。

課題１：言語形式によるスピーチレベルの実態はどのようになっているか

課題２：各スピーチレベルからどのような指標的機能が見られるか

4．研究方法

4．1　データ概要

本研究では2018年３月～６月にデータを収集した。調査実施では、タイ及び日本における日系企業・日系機関に就職している調査協力者として協力してもらい、ロールプレイよる会話データを収集した。調査協力者の詳細は表１に示す。なお、TNS全員は日本語上級者（N1-N2）である。データは接触場面13組と母語場面13組、１組につき10－15分の会話データである。場面設定についてはビジネス場面の設定で上司・部下による社内会話であり、内容は忘年会・社員旅行・海外出張についての打ち合わせ会話である。会話データは高木・細田・森田（2016）を参考にして文字化作業[2]を行った。

表１　両場面の調査協力者

場面	協力者	国籍	性別	平均年齢	人数
接触場面	TNS（部下役）	タイ	女性	28	13
	T-JNS（上司役）	日本	男性	42	5
母語場面	JNS（部下役）	日本	女性	27	13
	J-JNS（上司役）	日本	男性	45	5

4．2　分析方法

本研究では部下役のTNSとJNSの発話のみを分析対象として扱った。宇佐美（1995）[3]を参考にし、表２に示す

スピーチレベル基準の表を作成した。【丁寧体１】【丁寧体０】【普通体】の３レベルを基準にし、発話を文ごとに分けてスピーチレベルを判定する。本研究では挨拶・典型的表現の「ありがとうございます」、「お願いします」に関して、表現の丁寧度を考慮した上、【丁寧体０】に判定するが、尊敬語・謙譲語と共起する場合は【丁寧体１】に分析する。本研究では「が、けど、から、ので」、言いさし発話は分析対象として扱っているが、相づち、言い切れず中途終了の発話は本研究の分析対象外である。

表２　スピーチレベル基準

レベル	説明
丁寧体１	尊敬語、謙譲語、丁寧語（でございます、ございます）を含んだ文
丁寧体０	丁寧語（です・ます）を含んだ文
普通体	敬語が使用されていない文

宇佐美（1995）を参考に作成

研究課題１では、TNSとJNSによるスピーチレベルを比較的に分析し、研究課題２では話し手と聞き手の社会的関係・役割の構築、話し手のアイデンティティの観点で文脈と合わせて【丁寧体１】【丁寧体０】【普通体】というレベルごとの使用例を取り上げ、指標的機能を考察する。

５．結果

５．１　研究課題１の結果

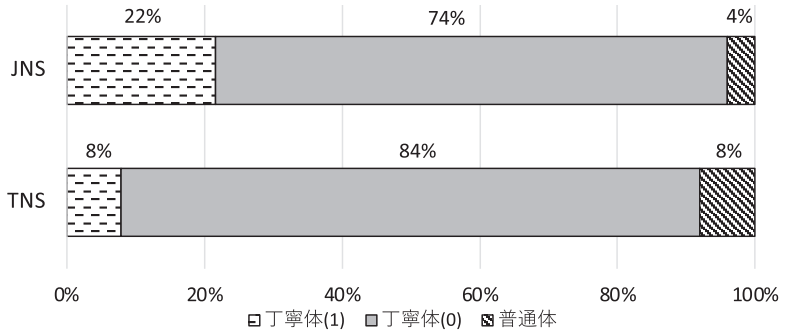

図１　TNSとJNSによるスピーチレベルの比較

TNSとJNSの対象発話を分析すると、TNSによる667総発話文数の中で【丁寧体０】が最も多く、84%を占めている。【丁寧体１】が８%、【普通体】が８%であり、両方とも10%未満となっている。一方、JNSの場合は、845総発話文数の中で最も多用されたのは【丁寧体０】、使用割合は74%となっている。次に【丁寧体１】が22%、【普通体】が４%という結果である。TNS組の中で【丁寧体１】使用が見られなかったのは３人だった。TNSとJNSによるスピーチレベルの割合を比較すると、【丁寧体０】はJNSよりTNSによる使用が多いが、より丁寧度が高い【丁寧体１】はJNSによる使用が多かった。【普通体】に関して、TNSとJNSの発話において少なく見られたが、TNSの使用の方が多いことがわかった。

本研究において敬語の言語形式の丁寧度を考慮した上で３レベルを基準として分析してみると、TNSの基本レベルは【丁寧体０】であり、JNSの場合は【丁寧体０】を基本レベルとして使用し、さらにより丁寧度が高い【丁寧体１】も多用していることがわかった。ここから、TNSと比較してJNSのほうがより丁寧度が高い表現を使用した特徴があると推察される。また、両者の結果には上司との会話においても【普通体】の使用も見られたことから、基本スタイルから【普通体】へのシフトが生じたと推察される。このことから、TNSとJNSによるスピー

チレベルは必ずしも一定しておらず、文脈によってスピーチベルルが混同的に使用される可能性があると言える。

５．２　研究課題２の結果

次にスピーチレベルと指標的機能の観点を結びづけ、会話における文脈的要素と合わせて機能を考察していく。TNSとJNSの会話において【丁寧体１】【丁寧体０】と【普通体】が使用された文脈から【丁寧体１】【丁寧体０】と【普通体】へのシフトの会話例を抽出し、以下提示する。機能の記述をする際、話し手と聞き手の相互間の関係性、話し手の役割、文脈に属している要素を中心に検討して論じる。

５．２．１　【丁寧体１】と【丁寧体０】使用から見た指標的機能

会話例１：TNSの使用例（TNS７：部下、T-JNS３：上司）

28	T-JNS３	掃除をして（.）その後ご飯を食べに行きましょ（.）みたいなスタイルが多いけど：
→ 29	TNS７	はい（.）そうですね【丁寧体０】それもいいですね【丁寧体０】 ええと：では12月の27日でよろしいでしょうか？【丁寧体０】
30	T-JNS３	うん、いいと思うよ
→ 31	TNS７	場所はあの：少しリサーチしてからまたご相談します【丁寧体１】
32	JNS３	そうだね

会話例１では、TNS７とT-JNS３が忘年会について相談している。TNS７の発話29ではT-JNS３対して述べた際に【丁寧体０】が用いられた。特に日程について確認する際、「ええとでは12月の27日でよろしいでしょうか」と発言し質問しているところから、【丁寧体０】使用に加え、「よろしいでしょうか」という表現も用いられた。そして発話31においてTNS７はより丁寧度が高い【丁寧体１】を使用し、話をまとめている。この会話例で見られた【丁寧体０】、【丁寧体１】、「よろしいでしょうか」の表現は、丁寧さを示すマーカーとして捉えられる。これらの使用によって、TNS７自身の立場が下、T-JNS３の立場が上と示され、上司・部下という上下関係が構築されている。そして、会話文脈の側面から考察すると、TNS７による【丁寧体０】【丁寧体１】などの使用から、仕事関係の改まった場面が作り上げられ、TNS７が会話の文脈を意識した会話参加者の役割を果たしていることが伺われる。

会話例２：JNSの使用例（JNS５：部下、J-JNS２：上司）

142	J-JNS２	あれだけど、まあ新年会でそれで構いません＝
→143	JNS５	＝承知致しました　はい【丁寧体１】 ではそういった形であのう忘年会の準備を進めて参りますので【丁寧体１】
144	J-JNS２	はい
→145	JNS５	またちょっともろもろ固まってきたところで（.）あの：ご相談させて いただきます＝【丁寧体１】
146	J-JNS２	＝そうですね　即時あの：相談しくるのがかまわないし
147	JNS５	はい
148	J-JNS２	逆にあの：（.）副部長巻き込んでも構わないので
→149	JNS５	あ はい 承知致しました【丁寧体１】 宜しくお願いします【丁寧体０】

会話例２においてJNS５は上司のJ-JNS２と忘年会・新年会について相談している。発話143から149までJ-JNS２に対して【丁寧体１】を使用し、最後の発話149では【丁寧体０】を用いている。【丁寧体１】が多用されたことから、JNS５が上司に向けて非常に丁寧な態度で会話を進行している特徴があると考えられる。【丁寧体０】のみ使用される場合と比べ、会話例２における会話はより改まった文脈が読み取れる。また、JNS５とJ-JNS２の関係性に関しては、【丁寧体１】と【丁寧体０】使用を通して、JNS５とJ-JNS２の部下・上司という

社会的役割が指標され、上下関係が構築されている。

５．２．２　【普通体】使用から見た指標的機能

会話例３：TNSの使用例（TNS２：部下、T-JNS１：上司）

34　T-JNS１　はい　そうですね＝
→35　TNS２　＝わかりました【丁寧体０】
予算も去年と同じ形で：ひとり：一泊（.）3000バーツぐらいで【普通体】
36　T-JNS１　3000バーツ　はい
37　TNS２　はい　よろしいですか？
38　T-JNS１　はい　大丈夫です

TNS２とT-JNS１は社員旅行の話題で予算について話している。会話例３を通してTNS２は基本的に【丁寧体０】のレベルでT-JNS１と会話している。このことからTNS２とT-JNS１の間に上下関係が維持されることが推察できる。しかし、発話35では、TNS２は予算の提案をする際に、T-JNS１に向けて「予算も去年と同じ形で一人一泊3000バーツぐらいで」と述べているところから、【丁寧体０】から【普通体】へのシフトがあったと言える。従来の【普通体】は距離の近い関係を示す機能を持つと捉えられるが、発話35における【普通体】使用は、会話の文脈から上司との距離を縮める効果が見られない。会話例３において、TNS２は提案する際に、断定表現を使用せず、言いさし表現として【普通体】を用いたことから、おそらくT-JNS１の反応を察しながら、会話を進めていると推察される。TNS２は発話35において情報伝達を優先して行った後、発話37ですぐ【丁寧体０】に切り替えた。以上の会話例３の文脈における【普通体】を使用したことで、従来の【普通体】の機能による距離の近い関係が指標されず、TNS２とT-JNS１の上下関係が維持されたまま、TNS２が提案する側でT-JNS１が提案を受ける側という談話上の役割が示された。TNS２による【普通体】の使用から談話上の機能があると考えられる。

会話例４：JNSの使用例（JNS10：部下、J-JNS３：上司）

74　J-JNS３　そうですね
熱海 伊東になんかあったですね：
75　JNS10　え：：
76　J-JNS３　名前忘れちゃいましたけど
→77　JNS10　伊東 確かに伊東になんかあったのかな：【普通体】
わかりませんね【丁寧体０】
ちょっとそれ調べて：（.）例えば場所決めた上で
78　J-JNS３　はい

JNS10とJ-JNS３が社員旅行の場所について話している。発話74と76ではJ-JNS３が観光地名を忘れたことに対して、JNS10は発話77において「伊東、確かに伊東になんかあったのかな」と述べている。発話77において【普通体】が使用された文末に「かな」が付加されているため、J-JNS３に向けず、JNS10自身に対した独り言だと捉えられる。この発話における独り言を通して、JNS10も伊東という観光地について分からないことが間接的に示めされ、J-JNS３と同様の立場にある者として寄り添うという談話上の役割が指標される。その後【丁寧体０】に切り替え、「わかりませんね」と述べているところは、聞き手に向けて丁寧な表現で明示的に伝えていると考えられる。

以上、TNSとJNSの発話における敬語使用・不使用をスピーチレベルの観点で分析を行った結果、TNSは【丁寧体０】を中心に使用したこと特徴が見られた。JNSは【丁寧体０】を最も多用したが、【丁寧体１】の使用も少なくないということが明らかになった。JNSはTNSより丁寧度の高い敬語を使用したことが言える。そして、TNSとJNSの両者による発話に【丁寧体１】【丁寧体０】【普通体】を指標的機能に着目すると、各レベルの敬語使用・不使用の指標的機能が見られた。上司との会話において、【丁寧体１】【丁寧体０】には話し手と聞き手の

関係性、役割、会話の文脈、談話的要素を示す機能があったが、【普通体】の機能には会話相手との関係より談話的要素を示す特徴があったことが確認された。

6．総合的考察

研究課題１では、TNSとJNSのスピーチレベルを分析した結果、上下関係を持つ社内会話において両者とも【丁寧体１】【丁寧体０】【普通体】のすべてを使用したことがわかった。【丁寧体１】【丁寧体０】【普通体】の中で、TNSは文末表現の「です・ます」という【丁寧体０】を最も多用したことから、【丁寧体０】が基本スタイルであるという特徴が推察された。それに対して、JNSは【丁寧体０】を中心に使用したが、尊敬語・謙譲語などを含む【丁寧体１】の使用も少なくないことがわかった。このことから、JNSは【丁寧体０】を基本スタイルとして使用し、より丁寧度の高い表現を示す【丁寧体１】も適宜使うという特徴があることが言える。両者の結果を比較的に考察すると、TNSとJNSの両者は、会話相手である上司に失礼にならないように、【丁寧体０】を中心に使用し、会話を進行したことが窺える。しかし、【丁寧体１】の使用の結果と合わせて考察すると、JNSによる【丁寧体１】の使用率が高かったことから、JNSはTNSより【丁寧体１】丁寧度の高い言語形式を選択して用いたことが言える。そして、【普通体】の使用に関しては、TNSとJNSの発話にもあったため、非母語話者のTNSでも上司との会話において、JNSと同様に文末の「です・ます」を使用していないことも確認された。このことから、上司との会話においても基本スタイルのスピーチレベルから【普通体】へのシフトが生じる場合もあることがわかった。TNSとJNSの結果から、仕事の話題について上司と会話する際、両者の発話に見られるスピーチレベルを通して、十分に丁寧に話していたことがわかる。Hudson（2011）が報告したように、上下関係を持つ会話においては立場の違いに応じて文末の「です・ます」のみならず、より丁寧度が高い尊敬語・謙譲語を使用する可能性もあり、文脈によって特定の機能を果たすために【普通体】へのシフトもあった。この点については本研究で扱った上司・部下のロールプレイ会話でもJNSの結果には先行研究と同様の特徴が再確認できた。さらに非母語話者のTNSによる使用にも敬語使用・不使用の混同的使用もJNSと同様に明らかになった。

研究課題２においては、本研究の会話データからスピーチレベルの指標的機能を考察した結果、スピーチレベルを通して言語形式による丁寧さのみならず、話し手と聞き手の関係、場面の改まり、談話における役割も示されたこと明らかになった。【丁寧体１】【丁寧体０】に関しては、TNSとJNSによる使用から、話し手と聞き手の相対的立場の相違に応じて上司に対する丁寧さの要素が見られ、上司・部下としての距離を示す機能や、上下関係への指標も考察された。また、TNSとJNS自分自身は部下として仕事上の役割を果たしていることが示された。特にJNSの会話例で見られた【丁寧体１】の多用は【丁寧体０】非常に丁寧な文脈や、より改まった場面の要素を示す機能も反映されたと考察できる。【丁寧体１】【丁寧体０】の指標的機能に関して、Cook（1998）、Okamoto（2011）、Hudson（2011）が指摘しているように、聞き手に対する丁寧さを示すマーカーとして捉えられ、会話参加者間に上下関係がある会話において前提となった指標性だと考えられる。そして、上司との敬語使用が求められる文脈の中でも、TNSとJNSの発話に【普通体】へのシフトがあることが確認できた。取り上げた【普通体】使用には、TNS及びJNSと上司の間の立場的関係や距離を示す機能より、談話上の機能が色濃く見られ、【普通体】使用によって特定の文脈における談話上の役割が指標されたことがわかった。また、TNSとJNSの発話において【普通体】から丁寧表現に戻った際、会話において上司・部下の上下関係が維持されたと言える。【普通体】の機能については、Cook（1998）、Okamoto（2011）、Hudson（2011）などで言及されたように、【普通体】の使用は距離の近い関係や改まり度が低い文脈への指標性として捉えられることが多いが、文脈によってそれ以外の機能もあり、会話の文脈に依存した談話上の機能を果たす可能性もある。本研究においては、上司・部下による社内会話からJNSによるスピーチレベルのみならず、非母語話者のTNSによるスピーチレベルの指標的機能まで考察でき、さらにスピーチレベルから談話上の機能が確認できた。上司・部下という上下関係を持つ会話において、日本の社会的規範に沿って適切な言葉遣いが求められる状況の中で、TNSとJNSによる【丁寧体０】【丁寧体１】の使用から、上司という聞き手との人間関係、仕事に関する会話という文脈への指標的機能が見られた。【普通体】の場合は、距離の近い関係や改まり度が低い要素を示すために用いられると言われている。しかし、上下関係を持つ会話及び仕事上の会話という文脈にも関わらず、本研究においてTNSとJNSの発話から見られた

【普通体】を考察すると、談話上の機能があり、特定の文脈において会話進行や談話展開のために、失礼にならず使用可能な表現と考えられる。研究課題１において言語形式によるスピーチレベルの結果を踏まえて、指標性の観点でスピーチレベルを包括的に捉えると、TNSとJNSの両者によるスピーチレベルで指標的機能と談話上の機能が確認された。本研究では母語話者のJNSのみならず、非母語話者のTNSによる敬語使用から見られたスピーチレベルの実態を言語形式と機能という双方の側面から明らかにすることができた。

７．まとめ

本研究では、ビジネス場面の社内会話データを取り上げ、TNSとJNSによる敬語使用・不使用をスピーチレベルで分析し、会話の文脈から指標的機能を考察した。ビジネス場面において上司と会話する際、TNSとJNSは【丁寧体０】に分類された文末形式の「です・ます」を中心に使用したが、JNSは尊敬語・謙譲語などを含む【丁寧体１】も多用したことが明らかになった。TNSとJNSによるスピーチレベルから、JNSの方が言語形式による丁寧度が高いことが言える。また、TNSとJNSの発話における【丁寧体１】【丁寧体０】【普通体】の使用から、上司との上下関係のみならず、TNSとJNSの社会的役割、談話上の役割が指標されたことが確認できた。敬語使用・不使用は言語形式の観点で丁寧度・改まり度を示す機能があるが、文脈を考慮して考察したことから指標的機能が見られた。

本研究の結果から、ビジネス場面におけるスピーチレベルを言語形式による丁寧度という側面と、文脈における指標的機能という側面の特徴が明確になり、コミュニケーションにおいては両方の側面を考慮することが欠かせないと考えられる。しかし、日本語教育現場では形式を中心した指導にまだ偏っているため、今後本研究の結果を活かして、敬語表現の形式に加え、敬語表現の機能や、文脈に応じた適切な表現の使い分けの指導を検討することが望まれる。本研究ではスピーチレベルという切り口から全体的現象とし指標的機能に着目して分析したが、分析の限界でスピーチレベルのシフトや、【普通体】の談話上の機能の分類を分析し切れなかったところが残された。そのため、今後は上下関係を持つ会話におけるスピーチレベルシフトと【普通体】の談話上の機能を課題としてより検討するべきである。また、分析対象については、上司の発話も取り上げ、上司・部下の間のスピーチレベルを分析することを今後の課題として取り上げたい。

【註】

1　スピーチスタイル及びスピーチレベル研究において使用される用語に関して、宇佐美（2015）によれば、「スタイル」（スピーチスタイル）は文末形式を文体として捉え、「丁寧体」と「普通体」に分類される。「スピーチレベル」は敬語レベル、待遇レベル、レベルシフトの観点を考慮した上で、言語形式の丁寧度として捉えている。また、「丁寧体」と「普通体」という用語の扱いについて、研究によって、「敬体」・「常体」、「デスマス体」・「非デスマス体」／「ダ体」、「フォーマル体」・「カジュアル体」という用語も用いられる。

2　本研究の会話例で用いた文字化の記号は以下の通りである。
「＝」発話が途切れなく接着，「：」音の引き伸ばし，「(.)」１秒未満のポーズ，「？」語尾の上昇音調

3　宇佐美（1995）ではスピーチレベルを、「＋レベル」、「０レベル」、「－レベル」という３レベルに分け、「＋レベル」は尊敬語・謙譲語などを含んだ敬語表現、「０レベル」は丁寧体（デスマスのみ）、「－レベル」は普通体という分類があると説明している。

【参考文献一覧】

宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用―スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』662, 27-42.

宇佐美まゆみ（2015）「日本語の「スタイル」にかかわる研究の概観と展望 ―日本語会話におけるスピーチレベルシフトに関する研究を中心に―」『社会言語学』18(1), 7-22.

蒲谷宏・金東奎・吉川香緒子・高木美嘉・宇都宮陽子（2010）『敬語コミュニケーション』朝倉書店.

菊地康人（1996）『敬語再入門』丸善ライブラリー.

喬曉筠（2014）「ビジネス場面に見る敬意表現の使用傾向―日本語母語話者と台湾人日本語学習者の比較―」『日本語/日本語教育研究』5, 175-190.

佐竹久仁子（2016）「日常談話にみられる敬語使用の実態」現代日本語研究会　遠藤織枝・小林美恵子・佐竹久仁子・髙橋美奈子編『談話

資料 日常生活のことば』ひつじ書房, 191–214.
高木智世・細田由利・森田笑著（2016）『会話分析の基礎』ひつじ書房.
三牧陽子（2002）「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示 ― 初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に―」『社会言語科学』5(1), 56-74.
フクシマ・ユパカー（2018）「タイの大学におけるビジネス日本語コースの現状と課題―カセサート大学を事例として―」『専門日本語教育研究』20(1), 3-8.
文化庁（2007）『敬語の指針』http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/sokai/sokai_6/pdf/honorifics_tousin.pdf［2021年 7 月 8 日閲覧］.
Cook, H.M. (1998). Situational Meanings of Japanese Social Deixis: The Mixed Use of the "Masu" and Plain Forms, Journal of Linguistic Anthropology, 8(1), 87-110.
Hudson, M.N. (2011). Student Honorifics usage in conversations with professors, Journal of Pragmatics, 43(15), 3689-3706.
Okamoto, S. (1997). Social context, linguistic ideology, and indexical expressions in Japanese, Journal of Pragmatics, 28(6), 795-817.
Okamoto, S. (2011). The use and interpretation of addressee honorifics and plain forms in Japanese: Diversity, multiplicity, and ambiguity, Journal of Pragmatics, 43(15), 3673-3688.
Silverstein M. (1976) Shifters, linguistic categories, and cultural description, Meaning in anthropology, 11-55.